

もくじ

千住掃部宿の名薬 豊屋太右衛門薬 1P 西新井の教員画家、豊千里 2P
道具の使用目的の変化・蠅帳 4P

足立史談

第603号

2018年5月15日

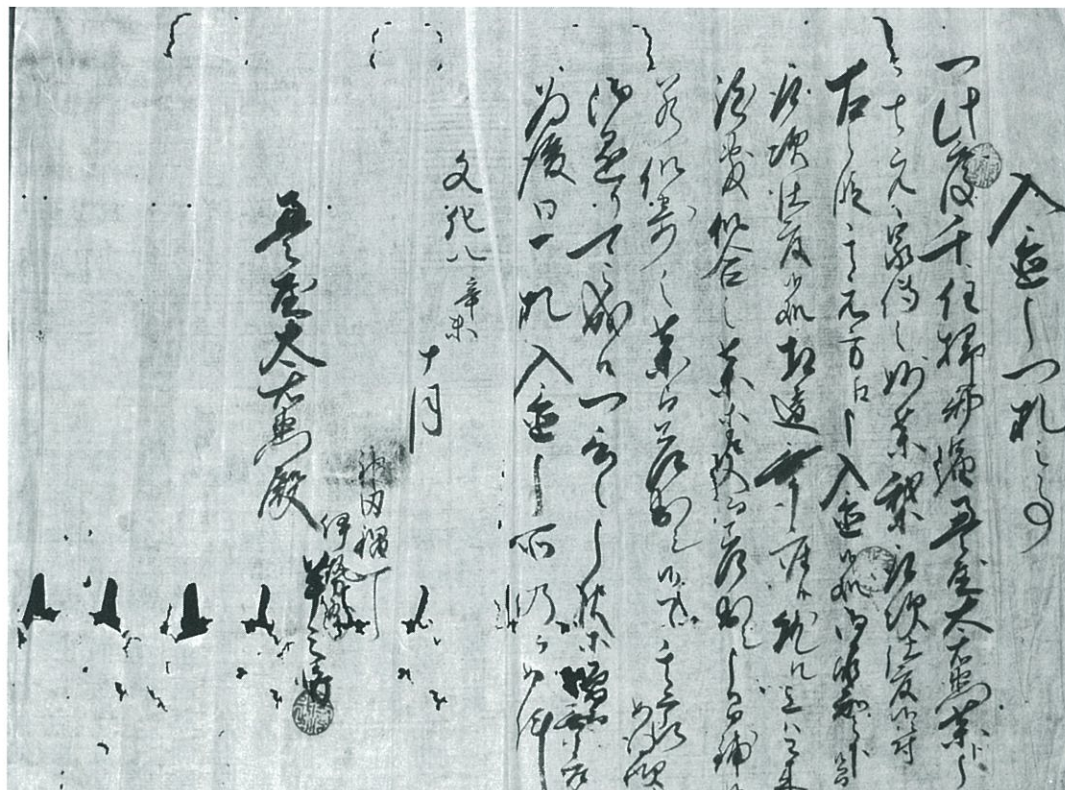
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

(30-308)



文化8(1811)年10月 千住掃部宿の製薬舗、豊屋太右衛門薬の取次についての証文。江戸の名薬として知られた豊屋薬の扱いを記す。(足立区千住仲町・若田家文書)

【若田家資料①】

千住掃部宿の名薬 豊屋太右衛門薬

多田文夫

千住掃部宿(千住仲町)の豊屋太右衛門家(若田家)は千住の琳派絵師、村越向栄を支援したことや、千住仲町氷川神社の祭礼時の四神鉾の献納など美術文化を支えた名家として知られている。このたび若田昇一氏のご好意で本業の製薬問屋について

の古記録等を拝見する機会を得たので関係資料を紹介していきたい。

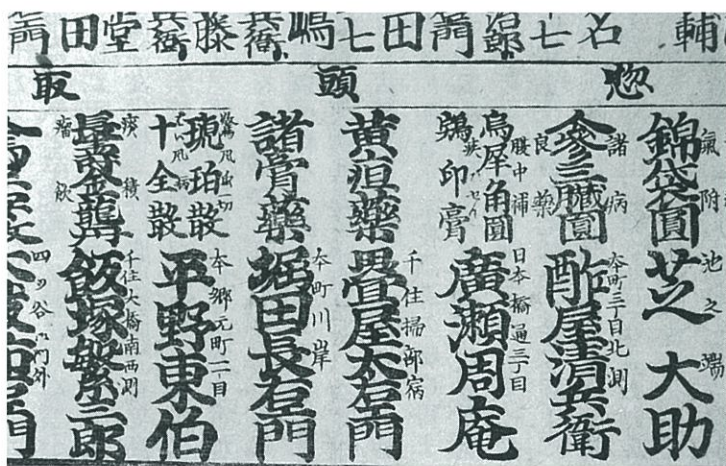
■名声 太右衛門家の薬は豊屋薬(たみやぐすり。豊屋太右衛門薬とも)といい、「江戸の薬」※

1、「陸羽街道の名物」※2などの異称で全国に知られた。効能は黄疽薬(おうだんやく)であり、明治十一(一八七八)年版行の番付「東京高銘 妙薬一覧」(若田家蔵)でも「惣頭取」として位置づけられ(右下写真ほぼ中央)、明治の東京

でも知られたことがわかる※3。

■名前の由来 豊屋薬という名前は印象的で、製薬の由緒にちなむ。

その昔、豊屋だった当主のところ旅の僧が訪れ一夜の宿を乞い、同



家に宿泊させたところ、僧侶は御礼として秘伝の処方を受けた。その薬は評判となり、豊屋から製薬に生業を変え、以後、代々栄えたと言う。

■江戸の取次証文 江戸で評判となった豊屋太右衛門薬(以下「豊屋薬」と略す)であるが、若田家文書には薬を江戸や周辺で販売する商人からの取次条件を誓約した証文が伝来し、販路の実態が見えてくる。その年代と江戸の商人を掲げると次の通りである。

No. 年代 取次

1 文化八年 神田鍋丁・伊勢屋 (一八一二) 千代田区神田鍛冶町)

- 2 文化八年 源助町・喜右衛門 (一八一二) (港区東新橋)
- 3 文化十年 麴町七丁目・藤右衛門 (一八一三) (千代田区麴町)
- 4 文政二年 渋谷宮益町・清次郎 (一八一九) (渋谷区渋谷)
- 5 文政九年 本町三丁目・儀兵衛 (一八二六) (中央区日本橋本町)
- 6 文政九年 武州川越・麻屋定七 (一八二六) (埼玉県川越市)
- 7 天保十二年 麴町竹町・黒田屋 (一八四一) (新宿区四谷)
- 8 天保十二年 神田鍋町・伊勢屋 (一八四一) (千代田区神田鍛冶町)
- 9 天保十二年 渋谷宮益町・橘和屋 (一八四一) (渋谷区渋谷)

※(一)内は年代と現在地域、渋谷区、新宿区から川越市など広範囲である。またNo.1と8は同一で三〇年の開きがあり代替わりに伴う取次証文であろうか。No.4と9関係も同様で代を継いで取次を行ったと思しい。

■取次の誓約 つづいて取次証文の出身についてみてみよう。巻頭写真の伝来する取次証文で最も古いものである(前掲一覧No.1)。

入置申一札之事

一、此度千住掃部宿置屋太右衛門 葉ト申一候、其元家伝之妙葉、我等取次仕度候二付、「右之段 其元方江申入置候処、御承知被

下候間、取次仕度候処、相違無御座候、然ル上ハ已来」紛敷似合之葉等決而差出シ候ハ、其節如何様之御懸り可被成候、一言之申訳等曾而無御座候、為後日一札入置申所、仍而如件、文化八辛未

十月 神田鍋丁 伊勢屋 半兵衛印

置屋太右衛門殿

※改行位置は「記号で示した。

文中での注目は「紛敷似合之葉」(まぎらわしき、にあいのくすり)、類似葉は扱わないという誓約を取っているところである。江戸で置屋葉は類似の葉が出ていたのだろうか。高い評価が背景にあると考えるのが妥当である。

広く江戸で知られ、取次店を抱えた製薬問屋、置屋太右衛門家のようにが見えてくる。千住と江戸の関係が深い事例の一つである。(つづく)

【参考文献】本文中※印

- 1 金沢市・中屋彦十郎薬局『尾山のくすり大将』第五五号
- 2 鈴木昶『日本の伝承薬』
- 3 松岡徹正『葉史学雑誌』14 (一) 掲載論文。一九七九年

(郷土博物館学芸員)

戦後足立の芸術家 西新井の教員画家、豊千里

小林 優

郷土博物館で行っている文化遺産調査では、地域に伝来した美術資料に加え、足立地域にゆかりのある芸術家たちへの調査も行っています。

そのような調査を行う中で、昭和、特に戦後の昭和二十年代からの足立地域における美術文化の一つの展開として注目されるのが、学校教育法の新制度下における小学校や新制中学校に赴任し、図工・美術を教えた美術教員たちの活動です。平成二十八年度文化遺産調査特別展で紹介した、歌人と謝野晶子の側近を務めた歌人・画家であり、足立区立第十三中学校で英語教師を務めたつづ、一時は美術の教科も受け持った千ヶ崎悌六氏などもその一例と言えますが、彼らの中には、地域の子弟たちを指導しつつ、第一線の画家として中央画壇に足跡を残す人物もいました。

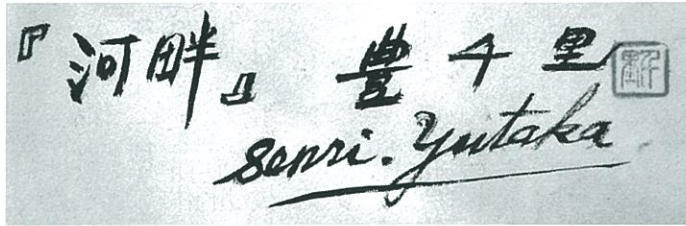
今回は、そのような足立の教員画家の一人で、昭和二十一年(一九四六)年より西新井小学校で図工を教え、洋画壇で旺盛な活動を展開した豊千里(ゆたかせんり、一九〇一〜八四)氏についてご紹介します。

■郷里、鹿兒島の教員とシマ 豊千里氏は明治三十四(一九〇一)年、鹿兒島県奄美大島内の中部に位置す

る名瀬市(現鹿兒島県奄美市)に、七人兄弟の長男として生まれまし。た。「千里」は鹿兒島県立加治木中学校在学中に、俳句の指導を受けていた図画教師から雅号として贈られたもので、本名は重一と言います。

進学した加治木中学校では、同好の士を募って図画の同好会を結成するなど、早くから絵を描くことを好んでいた豊氏ですが、その目標とするところは小学校の教員となることでした。そして、大正九(一九二〇)年に中学を卒業後、名瀬尋常高等小学校(現・名瀬小学校)、名瀬実科高等女学校(後に鹿兒島県立奄美高等女学校に改称)などで約十五年に渡り、郷里の教員として経歴を重ねていくこととなります。

■東京へ移る 昭和十(一九三五)年、豊氏は奄美高等女学校を辞し、三十四歳で単身東京へと移って、麻布区の飯倉小学校訓導の職を得ます。また、図画の教員免許状取得試験である「文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験」を受験すべく、試験対策指導機関として当時著名だった神田の緑陰社(りよくいんしゃ)で、洋画家の石川寅治などから石膏デッサンや油彩の指導を受



上：豊千里《河畔》水彩・紙 昭和39(1964)年 足立区蔵
下：《河畔》の裏に記された豊氏のサイン

となる教員たちが参加しており、区内小学校の児童写生会を開催して図画教育の振興を図るほか、教員相互の懇親と技術向上を意図して、部員たちで静岡・千葉方面への写生旅行を行うなど

け、二年後に同試験に合格して、図画教員の免許状を取得しました。

それ以降も引き続き飯倉小学校(当時は飯倉国民学校)で教鞭をとった豊氏ですが、昭和二十(一九四五)年、生徒を連れて栃木県足利郡に疎開中に、空襲で飯倉小学校の校舎が焼失し、廃校となってしまいました。これにより、疎開から戻った豊氏が新たに赴任することとなったのが、足立区の西新井小学校でした。

■西新井小学校の図工主任とシマ

昭和二十一(一九四六)年、図工専科の主任として西新井小学校へ着任した豊氏は、自身の所属する美術

団体「大潮会(だいちょうかい)」の展覧会に生徒を連れていくなど、熱心に指導に取り組みました。また、足立区の図工教員で構成される足立区小学校図工研究部の委員長となり、区内図工教員の中心的役割を担うようになります。

この図工研究部には、豊氏が結成に参加した新水彩作家協会の一員となる豊田芳郎(測江小学校)、新制作派協会所属の芸術家である木村林吉(江北小学校)、後に日展の審査員も務める洋画家の吉田民尚(弘道小学校)、そして後の足立区美術協会会長斉藤亥之助(関原小学校)といった、中央画壇でも活躍すること

していました。豊氏は西新井小学校在職中、十五年に渡り委員長を務め、区内図工教育に尽力したのです。

昭和三十六(一九六一)年、豊氏は定年退職により西新井小学校を離れることとなります。しかし、西新井五丁目に新たにアトリエを建ててデッサン・洋画を指導する「西新井画塾」の運営を開始し、美術団体「大潮会」にも参加する多くの後進を育成して、地域の美術教育家としての道を歩み続けました。

■画家としての活動

以上のように教育者であることを本分とした豊氏ですが、一方で油彩・水彩画家として画壇においても旺盛な活動の足跡を残しています。

豊氏が初めて公募展に作品を出展したのは、奄美高等女学校の教員であった昭和五(一九三〇)年、二十九歳の時の第十八回日本水彩展(日本水彩画会主催)でした。この頃までに特定の画家に師事した記録はなく、当時、画法の土台としていたのは、中学在学時に図画教師から受けた指導であったと考えられます。

以降、奄美を拠点に制作を続けていた豊氏ですが、上京して緑陰社に入り、石川寅治らの指導を受けたことを契機として、官展および東京を軸とする美術団体への参加を活発化していきます。

上京後、光風会、海洋美術会、新

水彩作家協会、創元会など多くの美術団体に参加した豊氏ですが、主な活動の舞台としたのは、官展(新文展・日展)と、元美術教育者で洋画家の浦田永錫(うらたえいしやく)を中心として昭和十一(一九三六)年に組織された美術団体「大潮会」でした。

大潮会は、結成前年に美術教育者の発表機関として組織された大東会が発展解消して結成されたものであり、その趣旨は、美術教育者の求めるべき写真に基づく健全な作品の創造と発表の場となることでした。自身もまた美術教育者であったことからこの団体に参加した豊氏は、昭和十一年の第一回展(第一回大潮会)から出展を開始しています。以降、河畔や港湾に浮かぶ船舶の情景を終生の画題として取り組みつつ、四十年以上の長きに渡って休むことなく作品の出展を続け、三回の特選受賞に、昭和十九(一九四四)年の第九回展では出展作《或る日の河岸》が前田利健侯爵の買い上げとなるなど、その画名を高める舞台となりました。昭和五十(一九七五)年からは団体展審査員を務め、さらに五十二年には理事に選出され、以降、会の運営を担うこととなります。

■区内を飾った豊氏の作品 戦後足立の美術教育の一端を担いつつ、中央画壇でも活躍した豊氏の作品は、

現在も区内に残されています。前頁掲載の豊氏筆による水彩作品『河畔』は、客席九四九席を誇る二階建ての大公会堂として、昭和三十八（一九六三）年に千住栄町（現・足立区中央本町、本庁舎付近）に建てられた、足立区文化会館の壁面を飾った作品です。

豊氏が得意とした停泊する船舶の情景を題に、昭和三十九（一九六四）年に描かれた一作であり、作品の裏に自筆で「足立区文化会館へ寄贈 1965.8 吉日 豊千里 一福岡、高松、岡山、地方展を終えて」と、「第24回創元会展出品 昭和40年（1965年）4月1日〜19日 於東京都美術館」という書き込み、そしてサイン



《河畔》の飾られていた千住栄町の足立区文化会館（昭和38年落成時の写真）

（前頁図版下）が記されていることから、本作は豊氏が官展と大潮会に次いで作品発表の主戦場とした、美術団体「創元会（そうげんかい）」の主催する団体展の第二十四回展に出展され、九州・四国・中国地方を巡回展示した後、豊氏自身によって文化会館へと寄贈された作品であることがわかります。

の屋内を飾ったのは、豊氏のような足立を拠点とする芸術家たちの作品であったことでしょう。戦後足立の芸術文化の一翼を担った美術教員の活動は、地域の文化史を考える上で重要な事柄となりまこと、足立の芸術文化史の新たな一面が見えてくることでしょう。

【参考文献】『豊千里水彩画集』（豊千里、一九七八年）

（当館学芸員）

道具の使用目的の変化・蠅帳 郷土博物館

昭和四〇年ころまで、下水路、汲み取り便所など、ハエや蚊の生息に適した場所が多く、ハエが大量に発生していた。網戸もなく開放していたため、家のなかへ入ってくることも多く、ハエを食べ物から守るための道具として蠅帳（ハイチョウ・ハエチョウ）とよばれる道具が使われた。

■蠅帳 蠅帳には、大きく戸棚型のもので、食べ物にかぶせる形のものとがあり、戸棚型ものは、引き戸に金網を張っている。被せ型のもも、木製の枠に緑に色づけられた金網が張ってある。網によって風通しをよくして内部

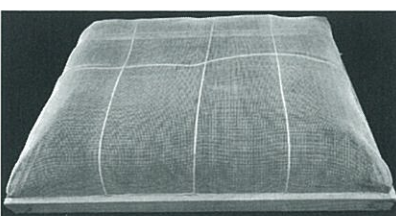
の温度を上げずに、食べ物を保存することができると、昭和三十年代に入ると、網に糸を使い、カサのように折りたたみができるものが普及するようになり、これは場所もとらずに保管でき、団地などの食卓でも重宝された。

こうした道具の用途や必要性は、冷蔵庫やラップなどもなかったことはもちろん、ハエが家に自由に入れる状態であることや、手軽に室内で使用できる殺虫剤がなかったことなど、当時の状況がわからない人には昔の道具である。

蠅帳については、フードカバーやキッチンパラソルという名称で、現

在でも販売されている。もちろんハエを防ぐという目的が第一ではなく、冷蔵庫に入れるまでもない短時間の食事の取り置きや、常温が適すお菓子などを軽くカバーする用途で使われているようである。ちよつとしたホコリ避けと、食卓の演出を兼ねていると感じられる。

ハエ避けという目的からは「昔の道具」であるが、現在の道具として、その利点のひとつが再認識され、引き続き使われている道具といえる。学校児童が昔のくらしを学習する上で、道具の変遷だけでは理解することのできない難しさを感じる道具である。



戸棚式の蠅帳
高さ 70.5 cm、幅 37.5 cm

被せ型の蠅帳
縦 52 cm、横 64.5 cm

